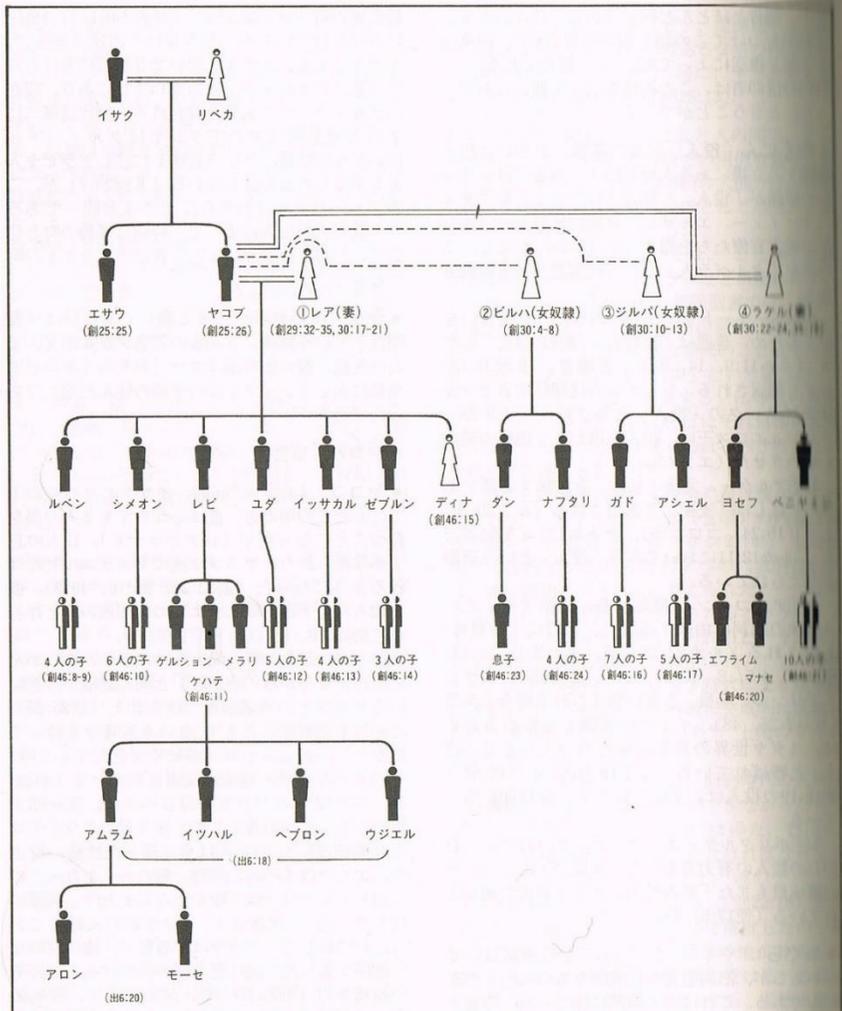


2021年3月21日 説教「御国をあこがれて」

創世記 49 章 28～33 節

ヤコブ



ヤコブは子ども達に遺言しました。これまでに二回、ルベンから始まり、ベニヤミンまでの十二人への遺言を見てきました。

1. 12部族への祝福について (28節)

①12部族 (28) 「これらすべてはイスラエルの部族で、十二であった。」
 かつてヤコブはパダン・アラムからカナンの地にもどって、エサウと再会と和解をしました。それから、しばらくの後にベテルにのぼって、神の前に出た折に、主はヤコブに現れたのです (35:7)。その時に、主は彼を祝福し「あなたの名はヤコブと呼んではならない。あなたの名はイスラエルでなければならない」 (35:10) と言われました。その後にもヤコブと記されることはありましたが、「神と戦う」という意味のイスラエルと名づけられたのです。彼には12人の男子が与えられ、彼らは後のイスラエルの国の部族を形成していったのです。

②父が子達に (28) 「これは彼らの父が彼らに語ったことである。」 「これは」とあるのは1～27節に述べられた、息子達の遺言のことで、父イスラエルが12人の息子たちに語ったことだと確認されています。ここに、彼らと記されてありますが、正妻のレアとラケルから生まれた子達とジルパやビルハという女奴隷か生まれた子たちとの差別は認められません。

③ふさわしい祝福 (28) 「彼は彼らを祝福したとき、おのおのにふさわしい祝福を与えたのであった。」そして、一人一人の子どもたちへの言葉は祝福であったと記されます。それも、一人一人に合った適切な祝福でした。ルベン、シメオン、レビに対しては大変に厳しい内容がありましたが、全体的には一人一人への愛に富んだお言葉であったといえましょう。ユダとヨセフには特別の祝福の内容がありましたが、それが彼らにふさわしいものであったからです。

2. ヤコブの願い (29～30節)

①エフロン畑の地 (29) 「彼はまた彼らに命じて言った。『私は私の民に加えられようとしている。私をヘテ人エフロン畑の地にあるほら穴に、私の先祖たちといっしょに葬ってくれ』ヨウ。ヤコブは「私は私の民に加えられようとしている」と述べていますが、アブラハム、イサクと続いた主の祝福の系譜に加えられようとしているという意味です。かつて、ヤコブの祖父アブラハムが妻サラがヘブロンで死んだときに、アブラハムはヘテ人に「私は異国人ですが、あなたがたの所で私有の墓地を譲っていただきたい」 (23:4) と願ったことがありました。そこに葬ってもらいたいと願ったのです。

②マクペラの地 (30) 「そのほら穴は、カナンの地のマムレに面したマクペラの畑地にあり」か。アブラハムが得たのはマムレのマクペラという地の畑地であり、そこにほら穴があつて、墓地に相応しかったです。

(23:9)。マムレというのはヘブロンから 10 キロほど北にある山間の地でありました。

- ③ 買い取った地 (30) 「**アブラハムがヘテ人エフロンから私有の墓地とするために、畑地とともに買い取ったものだ。**」す。アブラハムがヘテ人エフロンから、墓地のための畑地を買い取った代価は、銀 400 シェケルでした。彼はそれを支払い、境界線をつけて彼の所有となったのです (23:17-18)。

3. ヤコブの最期 (31~33 節)

- ① マクペラに埋葬された人々 (31) 「**そこには、アブラハムとその妻サラとが葬られ、そこに、イサクと妻リベカも葬られ、そこに私はレアを葬った。**」す。アブラハムはそのマクペラの墓地に妻サラを葬りました (23:19)。そして、アブラハム自身も老年は時代も平安のうちに、長寿を全うして、息絶えて、自分の民に加えられました。175 歳でした (25:7~8 節)。そして、自らが手にいれたマクペラの墓に葬られました。また、ヤコブの父イサクは 180 歳まで生き、マクペラに葬られ、その妻リベカもその地に葬られました。さらに、ヤコブの妻レアもそこに埋葬されました。いわば、そこは一家の墓でした。

- ② 墓地購入経緯 (32) 「**その畑地とその中にあるほら穴は、ヘテ人から買ったものである。**」た。この節の内容はすでに 30 節に記されているものですが、マクペラの墓に購入の経緯が確認されています。約束の地カナンの地にアブラハム以来の墓地が設けられたということです。

- ③ ヤコブの死 (33) 「**ヤコブは子らに命じ終わると、足を床の中に入れ、息絶えて、自分の民に加えられた。**」そして、ヤコブ自身も、今はエジプトの地であって、命を終えようとしていました。息子たちへの遺言を述べ終えると、最後の力をふりしぼって足を床の中に入れ、息絶えて、自分の民に加えられていったのです。147 歳の生涯でした。彼は予め、ヨセフにカナンの地のマクペラに葬るようにと伝えてありましたので、その言葉が実行されることとなりますが、それは次の章に記されます。

《結論》

ヤコブの波乱万丈の生涯は閉じられました。振り返れば、彼はエサウと双子の兄弟として生まれ、母リベカに愛され育ちましたが、いかにせん次男でありました。ヤコブはエサウから、長子の権利をもぎ取り、年老いた父イサクを欺いて、長子の祝福を奪い取ってしまいました。彼はエサウから逃れるようにして、北の地パダン・アラムに叔父ラバンに頼ります。その地において、ラバンの娘レア、ラケルと結婚し、12 人の子ども達をも与えられることとなります。それは大いなる祝福でありました。しかし、一方ではパダン・アラムの地にいる時に片時も忘れることができず、通奏低音のように傷みとしてあったのが、兄エサウのことでした。兄を欺いたことを覚えて 20 年。ヤコは

導かれて、約束の地ナンの地に一族でもどることになりました。カナンの地にもどることはすなわちエサウと再会することでした。しかし、主の憐みで赦しと和解が与えられ、カナンの地に住むことができました。その後は息子達も成長し安泰でしたが、次の試練がやってきました。最愛の息子ヨセフを失ってしまったのです。その後のことは、比較的最近に、ヨセフの人生の学びをしてきました。結果としては神の御手の中であって、ヤコブは飢饉の時代にエジプトの宰相ヨセフの招きに応じて、エジプトで晩年を過ごし、その地で命を終えることになりました。

その人生は、確かに若き時代から頭が良くて、要領が良かったので

す

が、信仰面においては、神の前にその岩のごとく固い魂は、神に砕かれなければなりません。主なる神は何度もヤコブに臨まれましたが、まずはエサウから逃れて北の地に行く途上での出来事があります。彼は石を枕にして寝て夢を見て、神を体験したのです。そこはベテルと名づけられますが、ヤコブが強く神を意識する時となりました。

(28 章)。カナンの地にもどる途中、ヤコブの渡しにおいては、夜明けまで、神と格闘するという出来事がありました (32 章)。そうしたことを経て、ヤコブは信仰者として練られていったのです。上でも見たように、その晩年にも大試練もありましたが、総じていえば、主から試練を通して、信仰の学びを与えられていったのだということがわかります。

そして、長いヤコブの人生も、その終わりを告げる時がやってきました。息子達への遺言は、アブラハム、イサクと受け継がれてきた信仰に基づくものでした。ヤコブは後のことはヨセフに任せ、天の神のもとに召されていくことを確信し、平安のうちに、その命を終えたのです。

私たちにも、やがてこの地上での命を終える時が必ずやってきます。その時までにしておかなければならないことがあります。それは、三浦綾子さんが云うところの、「死ぬという仕事」でありましょう。「死への備え」と言っても良いのです。それは現実的な墓の問題などもありますが、それ以上に、私たちの魂の準備です。キリストは私たちの救いのために十字架上で、私たちの身代わりになって死に、葬られた後、三日目によみがえられました。ここに神の愛と、神にある希望が示されています。キリストを信じる者は救われて、永遠の命、復活の命が与えられます。この確信をいただいてこそ、私たちは平安のうちに、この地上での命を終えていくことができるのです。地上の命を終えるということは、信仰者にとっては神の御許に召されていくことです。主とともにあゆむ恵みと平安の場所に移されることなのです。今こそ、主を信じて歩みましょう。信仰者も地上の命を終えることは天

に召される確信をいただいて生きていきましょう。

「うつし世をば離れて、天がける日、きたらば、いよよ近く、みもとに行き、主のみ顔をあおぎみん」。讚美歌 320 を歌いつつ、ヤコブと同じように、私たちも御国をあこがれつつ過ごしてまいりましょう。